

『#対決』（月村了衛著）を読んでみた。著者は2010年、『機龍警察』で小説家としてデビュー。冒険小説の新たな旗手として高く評価される。吉川英治文学新人賞、大藪春彦賞、日本推理作家協会賞、山田風太郎賞を受賞。

世の中、男性優位の社会である。女性というだけで無数の理不尽に耐えなければならぬ。医療現場も然り。

なぜ女性の医学部入学者数を減らそうとするのか。その辺の本音がよく書かれている。過酷な勤務実態に対して妊娠、出産、子育てに時間を割かなければならぬ女性は戦力として計算しにくいというものがその理由である。新研修医制度の導入によって、初期研修期間（2年間）は大学の医局に入る者がいないため（200人減）、確実に在籍する戦力として男性が欲しいという状況もその動きに拍車をかけた。

2018年に医学部不正入試問題が発覚したことが執筆のきっかけであろう。複数の大学医学部で女子や多浪生が不利になる措置が取られていた。本書は、医科大学の女性差別入試をめぐる女性新聞記者Hと女性医大理事Kが真っ向勝負、というのが謳い文句。

Hはスクープしたい。Kは大学の名誉を守るため隠蔽に加担し、不正入試を頑なに否認。女性2人の丁々発止の闘いが始まる。他社を差し置いてスクープが取れるのか。頑なに否認するKから証言を引き出せるのか。

本書は予定調和的な結末を迎えるが、現実はどうであったのであろうか。警察小説を書き続けてきた著者の突然に取り上げた医学モノと期待したが、思いのほかサプライズのない展開であったと感じるのは私だけであらうか。

最後に、実際に起こった事実を確認しておこう（ウキペディアから引用）。2018年7月、文科省局長が息子をT医科大学に裏口入学させ逮捕された。それをきっかけに、Y新聞がT医科大学に関する疑惑を探り不正入試を報道した。報道を受けて同月、T医科大学が女子に対して一律減点をしていたことを内部調査の結果として公表。厚生労働省が全国81大学を調査。その後、2018年10月15日にSy大学、国立Ko大学、I医科大学、Ka医科大学、Fu大学、Ju大学、Ki大学、Ni大学、SM医科大学が得点調整をしていたことを公表した。SM医科大学だけは、募集要項にある「1次試験の成績に出願書類を総合の上、合格者を決定する」との記載部分が「調査票を参考にすることを明記してい

る」、「属性による一律な評価は行っていない」とし不正には当たらないとした。

2018年12月14日、厚生労働省は不正を認めた9校を「不適切」と認定し、SM医科大学を「不適切な可能性が高い」とした。2019年6月11日、文部科学省は2018年以前の入試で本来なら合格していたはずの元受験生のうち43人が2019年4月、計8大学に追加入学したとの調査結果を発表した。

2021年度の入試ではデータのある2013年度以降の医学部の女子の合格率が男子の合格率を初めて上回った(女子13.60%、男子13.51%)。2022年度の入試では男子14.2%、女子13.1%となり、再び男子が逆転した。